

台灣原住民研究

第 11 号

発行団体名の変更について	笠原政治	3
[論文]		
我が学問に捧げる鎮魂歌	金子えりか	5
現代台湾のもう一つの脱植民地化：原住民族運動と多文化主義	若林正丈	13
埔里盆地における最後の原住民		
：浅井更偏・島居龍藏台湾映像資料の探求	清水 純	55
先住民における多元的「貨幣」受容形態：東洋と西洋	角南聰一郎	83
鳥に変態する蛇：日本における百鬼蛇の伝承	蜻島 直	106
[小特集：「牡丹社事件」をめぐって]		
《野蛮人》の表象、あるいは植民地主義の起源		
：明治7年の台湾出兵をめぐる諸問題	山路勝彦	142
：パイワン少女オタイからみる「牡丹社事件」		
：関係者たちの記録と国立公文書館所蔵の公文書を中心に	山本芳美	167
「牡丹社事件」再考：なぜパイワン族は琉球島民を殺害したのか	大浜郁子	203
：ハヅロク（Valjeluk）からの言葉：信頼と希望	華阿財（石垣直訳）	224
[研究ノート・資料]		
台湾に蛇神判はあったか	山田仁史	229
13番目の台湾原住民サキザヤ族の認定	原 英子	235
[報告・短信]		
國分直一、馬淵東一両先生を偲ぶ：木下尚子教授への公開便（宋文薰）		
：しさんの「正名回復」：身分証交換の一こま（山本芳美）		
：台湾原住民研究会：仙台にて開催（山田仁史）		
：有縁樹（ヨウユンツ）：（宮崎真央子）		
[彙報]		

國分直一、馬淵東一両先生を偲ぶ
木下尚子教授への公開便

宋文薰

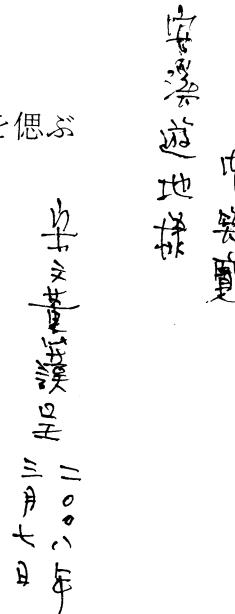
Email to Professor Naoko Kinoshita
College of Literature
The University of Kumamoto
March 2nd 2006

Dear Prof. Kinoshita,

Please accept our sincere congratulations on your recent appointment as a member of the Japanese Science Council. This position is not only known as the highest honor in the Japanese academic circle but also has the privilege to speak to the government officer. We are sure that late Prof. N. Kokubu would have been proud of your success if he had been still in this world.

Yours truly,

宋文薰、宋綾子
Mr. & Mrs. Wen-hsun Sung



木下尚子先生：

連照美さんあての email を拝読させていただきました。國分先生のお弟子さんの中では、貴女が最高の名誉を獲得されました。しかし、ただでさえお忙しい毎日には、とてつもない重責が加わることになりました。余り冗舌になるときらわれますから、前便はそこそこに筆をおきました。ですからこれは、新しく稿をおこしたとされても、前便の続きだと思われても御自由です。

御高作「梅ヶ峠の國分直一」¹⁾で、國分先生は「一途な純粹さ」を失わず、「権力や権威主義を嫌悪」し、「マルキスト」として育って行かれたことが書いてありました。國分先生の純粹さについては、金子えりかさんも声を大にして口述しております²⁾。その純粹さを示す例として、國分先生が話して下さった、台北高等学校時代のエピソードをお書きしました。

ついでですから、ごく僅かな人しか知らない物語りを書きます。その前に、誰でも知っている次の話を思い出して下さい。京都から三四郎³⁾と相乗りした子持ちの女は、名古屋の宿屋で相部屋になりました。

……三四郎は着物を脱いで、風呂桶の中へ飛び込んで、……こいつはやっかいだとじやぶじやぶやっていると、……ぎいと風呂場の戸を半分あけた。例の女が入り口から、「ちいと流しましょうか」と聞いた。三四郎は大きな声で、

「いえたくさんです」と断った。しかし女は出でていかない。かえってはいって来た。そうして帯を解きだした。三四郎といっしょに湯を使う気とみえる。べつに恥かしい様子も見えない。三四郎はたちまち湯槽を飛び出した。そこそこにからだをふいて……少なからず驚いていると、……

そこへ下女が床をのべに来る。……頑固に一枚の蒲団を蚊帳いっぱいに敷いて出て行つた。……

「失礼ですが、私は癪症でひとの蒲団に寝るのはいやだから……」

三四郎はこんなことを言って、あらかじめ、敷いてある敷布の余っている端を女の寝ている方へ向けてぐるぐる巻きだした。そうして蒲団のまん中に白い長い仕切りをこしらえた。女は向こうへ寝返りをうつた。三四郎は西洋手拭を広げて、これを自分の領分に二枚

続きに長く敷いて、その上に細長く寝た。その晩は三四郎の手も足もこの幅の狭い西洋手拭の外には一寸も出なかつた。女とは一言も口をきかなかつた。女も壁を向いたままじつとして動かなかつた。

夜はようよう明けた。……

……改札場のきわまで送つて來た女は……

「あなたはよっぽど度胸のないかたですね」と言って、にやりと笑つた。……

その後三四郎が女に自信をなくしたのは、このためかどうかは、漱石にきかないとわかりませんが、最後まで口の中で迷羊（ストレイシープ）、迷羊（ストレイシープ）と繰り返したことは有名です。

前置きが大変長くなってしまいました。これからお書きする話は、語り手から公開するゆるしを得てはいませんが、公表してはいけないとも言われていません。家内にとっては旧聞であり、連照美さんも知っている事柄です。登場人物は皆よく御存知の方達で、その主役は國分直一と馬淵東一の両先生です。本誌2001年第5号と2005年第9号にはおふたりの特集があり、台湾研究史上永久に語りつがれる偉大なキャラクターの持主です。雲の上の近より難い人物になつてしまつ前に、いくつかの余り知られていないエピソードを御紹介します。本当は語り手が自分で書くのにこしたことはないのですが、上に引いた本誌の記事から、御自分で書かれることはないと確認しましたから、私が筆を執ることにしました。

金子えりかさんは、國分直一「先生は非常に恥ずかしがり屋」⁴⁾だと口述されるだけでなく、同じ号に「先生は非常にシャイで」⁵⁾あつたと書いております。このくりかえしは、その印象が強烈であったことを物語っております。金子さんは、とてもおかしそうに、そして少しあきれたように、次の話をしてくれました。

國分先生と二人で調査した1960年の八重山諸島の宿屋では、他に空き部屋があつても、一緒に来た客は男女をとわず、いやおうなしに同じ部屋に入れられ、一つ蚊帳に寝かされたものです。ところが國分先生は夜半に起きてきて、「僕は女人の人と頭をならべてはねむれませんので、頭と足とを反対にしててもよいですか」と許可を得てから、むきをかえて寝たのです。それでねむれたかどうかはききませんでした。とにかく國分先生のひとがらが大変よく出ている話です。その他の「微笑ましいエピソード」を書くと「一冊の本」になると、金子さんは書いて居ります⁶⁾。

ところが本文起稿後、貴女と笠原政治さんから相前後して國分先生の自叙伝『遠い空』⁷⁾をいただきました。はからずもその一節に、次の物語りがあつてびっくりしました。先生の「絹ごしの豆腐のような」⁸⁾筆触を引用します⁹⁾。

学校には、Kさんという御主人を亡くした婦人が……まだ20代にしか見えない、にこやかなきれいなひとだった……

……こんなにおそくなつたのだからどうしても泊つてゆけといつてきかないままに、……それから私はKさんのいうままに、二人で観電停留所の近所の風呂にいった。……風呂から帰つてくると、私は無理に彼の女の浴衣をさせられた。……この浴衣にはKさんの膚がふれたこともあろうと思うと、私は浴衣の中で身のちぢまる思いがした。……Kさんからなるべく離れた所で早くねたいと思った。一時もとうに過ぎて、静けさはKさんの家もその家を囲む苔をも包んでいた。

私が母親以外の女性とふとんを並べてねたのはこの時がはじめてであった。

私はどうしてもねつかれなかつたが、ねむつたふりをしていた。そのうち私の足の上に重いものがのつたように思つた。毛布の下から、私はそれがKさんの足らしいと気づくと、私の血管の中で全部の血が急にとまつたように思われた。そして次の瞬間熱いものが顔に上がつてきて、私の顔はかあっと赤くなつたであろうと思った。

私は、Kさんってなんと寝相のわるい人であろうと思った。また女人の足ってだれもがこんなに重いものであろうかと考えたりはじめた。しかし間もなく、私のえり首になにかなめらかなすべすべした感触がしたかと思うと、私は胸がはだけるようにぐいっと強くKさんの方に引かれた。私は全身を固くした。何か恐怖のやうなものが私を支配した。Kさんの手はまだ私のえりをにぎついていた。Kさんが私を風呂につれていたりしたのは何のためだったのか——私は急にはずかしさに全身がほてつて、起きて蚊帳の外の電気をつけた。Kさんも起きて明るい電気の下で私をまぶしそうに見た。

「僕はどうもなれた所でないとねむれませんので帰りたいのですが」といいながら、私は着替えようとしたが、慌てているものであるから、片方のズボンの足に両方の足を入れようしたり、上衣の袖にひっかかるて容易に手が通らなかつたりした。

「こんなにおそくおかえりになるなんて」Kさんは消え入るようにいった。

Kさんはきつと清潔なかりをきていて、すべての秘密をその衣類の下に包んでいた。

これは國分先生が、1933年三月京都大学を卒業して、四月から八月まで京都の修学院尋常高等小学校で、期間代用教員をしていた時の出来事になっています。先生は私に、大学卒業後一生小学校の教員をしたいと思ったが、校長なら資格はいらないが教師は資格がないければ駄目だといわれたと、話して下さったことがあります。

國分先生はお母さんと奥さん以外の女性とふとんを並べて寝ると、ねむれなくなる方だったのですね。

ここで前便に書いた、台中から台北への夜行列車で國分先生が話して下さった、台北高等学校時代の貴重な体験が、意味あいを深めるように思われ、薄れゆく記憶をもう一度たどることにしました。

1948年八月、國分先生が台湾大学史学系の学生三人をひきつれて、台中近郊の先史遺跡で発掘調査をしたことは、『台湾考古誌』¹⁰⁾に記されております。調査終了後、台中から台北への帰りは、先生と私の二人だけになりました。台湾西海岸の鉄道が全線電化したのは1979年、第一号のディーゼル車が走り始めたのは1954年で、それまでは古ほけたSレバ車だけでした。台中で列車に乗ると間もなく大甲渓の鉄橋です。鉄橋を渡り切るといきなりトンネル地帯に入ってしまいます。三等客車の窓から猛然と石炭車の黒煙が吹き込み、話はおろか呼吸することさえ困難になったものです。師弟が自由に会話をはじめたのは苗栗を過ぎてからでした。國分先生は話好きでしたが、私はいまでもおしゃべりです。東京が空襲で壊滅するのを目撃して間もなかった私は語り手で、先生は聞き手でした。話は私の東京留学時代の事となり、昼は明治大学予科、夜は東京外語英文科の夜間部で、英文書籍の乱読からはじまりました。続いて明大予科の英文教師は夏目漱石の弟子として有名であった林原耕三¹¹⁾先生で、林原來井の俳名でも名高く、俳句の師匠でもあったので、特に目をかけて下さり、世田ヶ谷のお宅に呼ばれていろいろな話をきいたことを話しました。國分先生は絶句していました。そして感にたえかねて、次の話をして下さいました。

僕が台北高等学校に入学したのは1927年で、十九才の時でした。台北高校の英文教授は奇しくも君と同じ林原耕三先生でした。その後林原先生は台湾総督府の海外研究員として、二年間ヨーロッパに洋行しました。先生の留守宅に上ると、奥さんがパリーから郵送されて来た先生の絵入りの手紙をみせてくれました。それには、最近フランスの女性はこんな道具を使って自分で楽しんでいる。お前もさぞかし同じ事をしているだろう、と書いてありました。僕はすごく奥さんに同情して、先生の不道徳性に悲憤慷慨したものです。

今考えてみると、あの恥ずかしがり屋の國分先生が、長期洋行中の林原先生の留守宅に、奥さんを尋ねるというのは不思議なことです。そして夫婦間のひめやかな情愛をはらむ露骨な絵文を、よごれを知らない紅顔の美少年¹²⁾に見せる奥さんは、その恥ずかしがるのをみては、ひそかに楽しんだのだろうと思います。國分少年は、林原夫人に甘えたかったのでしょうか。

上文では國分先生の事ばかり書きました。その中で、金子えりかさんが話してくれた挿話が、重要な比重を占めて居ります。つまり國分先生と金子さんが二人で八重山諸島調査をした時におきたエピソードです。その時の調査について、金子さんは再三「本当は馬淵先生と三人で行くはずだったんです」と話したり¹³⁾、書いたり¹⁴⁾して居ります。そして「馬淵先生は急に都合が悪くなった」¹⁵⁾こともくり返し¹⁶⁾のべて、その結果「私は殆ど面識のない國分先生と二人で出発することになってしまった」¹⁷⁾と書いています。結局金子さんは馬淵先生のかくし事を最後まで筆にされなかつたわけです。だけど金子さんは私達に、本当のことを、とてもおかしそうに話してくれました。

馬淵先生は奥さんに「國分君と三人だよ」と説明されたが、馬淵先生に前科があったのか、馬淵夫人は國分先生に問い合わせの電話を入れました。「いや、そんな話は知りません」という返事でしたから、馬淵先生は勿論禁足になってしましました。その為に金子さんは、「殆んど面識のない國分先生と二人で出発することになってしまった」¹⁸⁾わけです。それだから、國分「先生は…殆ど口を開いてくださらず、旅館での食事も別々に頂いたので」¹⁹⁾す。この挿話は、國分、馬淵両先生の性格を端的にあらわして居ると思います。本誌第9号の「金子えりか先生インタビュー」を読んではじめて、馬淵先生が金子さんに説明しなかつたことがあるのを知りました。

それを書きます。金子えりかさんがはじめて台湾に来たのは、1968年の春です。日台間の交通費を自己負担されれば、台湾滞在中の費用は私が持つから、台東県成功鎮麒麟遺跡の発掘におよびしますという手紙を金子さんに出しました。麒麟遺跡は後に、台湾東海岸新石器時代文化の一系統、所謂「巨石文化」の名祖となった遺跡です²⁰⁾。問題は、金子さんが、宋先生が私を「呼ぶことになった…いきさつはよくわかりませんけど」²¹⁾と、口述しながら、「ハイネ＝ゲルダーン先生との関係があつてね、巨石文化の関係で呼ばれたんですよ」²²⁾と臆測して居ることです。

その「いきさつ」は馬淵東一先生が金子さんに話すべきこととして、私からは言わなかつ

たのです。ともかく馬淵先生は先生格の大先輩として畏敬して居りましたが、お会いする度に飲み明かしてしまう間柄になってしましました。1968年のはじめごろだと思います。台湾原住民の調査にいらした先生が珍らしくあらたまつて、私に一つの頼みごとをしました。芸大教授で日本の有名な指揮者と結婚しているオーストリー女性、金子えりかさんは、台湾原住民の埋葬慣習についての論文を書いて、ウェーンの大学から博士の学位をもらっているのに、台湾に来たことがないから、一度呼んであけてくれないか、ということでした。勿論、即座に承知しました。馬淵先生がその時、つけ加えた説明がふるつていて書いておきます。「ドイツ系の女性には、ビール樽のように太った型と、カチューシャ²³⁾のように可愛いほつそりした型がある。金子さんはカチューシャ・タイプだ」。この為に家内と私は金子さんことをカチューシャと呼ぶことになりました。

私は金子さんとは全く面識がなかったので、空港への出迎えは、当時中央研究院民族学研究所に居られたデ・ボクレール女史²⁴⁾につきそっていただきました。金子さんは馬淵先生に感謝の言葉を申し上げる機会を失ってしまいましたが、「金子えりか先生インタビュー」²⁵⁾や「馬淵東一先生の思い出」²⁶⁾等を拝読しますと、御師弟の情愛の細やかさに胸をうたれます。その中の一節を引用してみました²⁷⁾。

「共同の調査計画は何回も作られましたが、実現することはなく、馬淵先生と私は一緒にフィールドワークをしたことは有りません。」

「しかし、わたしが都立大学の、馬淵東一...やその他の学者の側に勤める機会を得た時期を私の研究生活の黄金時代であると思います。馬淵教授の部屋では常に長い、刺激的な議論が行われ、それはしばしば深夜の電話でのつきることのない会話に続くでした。」



上文にデ・ボクレール女史のことが出て来ました。金子さんは本誌に、「デ・ボクレール女史について」²⁸⁾を書いております。又、近年亡くなった鈴木満男さんが、同じ号に「馬淵東一先生と私」²⁹⁾というややセンチメンタルな長文を書いておりますが、その中にもデ・ボクレール女史のことが出て来ます。女史は1955年から1973年まで台湾中央研究院民族学研究所で研究生活をして居り、院内の蔡元培紀念館二階の一室が宿舎でした。私は1956年から二年間、週一回同院で日本語を教え、夜は女史の部屋の階下に宿泊しました。当時、中央研究院の研究所数は大変少なく、蔡元培紀念館の空き部屋には馬淵さんや鈴木さんのような、短期滞在の「訪問学者(Visiting Scholar)」がよく宿泊したものです。馬淵先生は

これが馬淵先生が墓足りますよ。

英語が達者で、デ・ボクレール女史の隣の部屋に宿泊したことがあります。階下の私の部屋に、デ・ボクレール女史が尋ねて来て、笑いをこらえながら話してくれたことです。「ノックでドアを開けてみたら、Prof. Mabuchi がはだかで立っていた。山地の調査から帰って bath room で衣類の洗濯をして、窓の手すりでかわかしていたが、夜半の風で庭に飛ばされて、木の枝にかかりていますから、拾ってきて下さい。男の人のパンツを拾いにいかされたのは、生れてはじめてです。」デ・ボクレール女史はドイツ貴族で、元伯爵婦人でした。

この他、いつのことであったか覚えていませんが、「山地に土産物として持って行きたいから、女性のズロースを一ダース買って来て下さい」と頼まれたと、これも笑いながら女の人が話してくれたことです。「いったい、何でこんなに沢山いるのだろう」という、つけ加えがあったのを覚えております。

最後は、私だけが知っている話です。馬淵先生は1956年、戦後はじめて台湾を訪問しました。その時私をつれて、台北の盛り場であつた重慶北路の円環近くの二階に住んでいた、台北帝大史学科時代の数少ないクラスメート張樑標氏を訪問しました。そこは張氏夫人の里の実家で、台北二中の私の同級生李錦璋君が張夫人の弟で、そこで出会ってびっくりしました。馬淵先生と張夫人は話がはずみ、一緒に放歌高吟した甘美な時間を懐しそうに回顧していました。訪問を終えて先生は私に、次のように述懐しました。張君は学生結婚で奥さんは美貌で有名だった。当時の美人女優の田中絹代にそっくりだったから、「田中絹代」と呼んだものだ。その後の台湾再訪でも、私は何回か「田中絹代さん」訪問のお供をさせられました。

「國分直一先生の自伝的語り」³⁰⁾である『遠い空』³¹⁾の三分の二を占める先生自筆の第一部³²⁾は全編が清純なロマンチズムにあふれ、巻をおくことが出来ませんでした。

馬淵東一先生は愛煙家、酒豪として余りに有名で、奇矯な行為も多く、「馬淵伝説」³³⁾、「最後までさまざまな武勇伝や逸話などに事欠かない」³⁴⁾豪傑として、國分先生の対極におかれの方です。然し、おふたりとも愛弟子にはこよなく慕われたことは、上文に書きました。松澤貞子さんは、いみじくも、次のように書いております。馬淵先生は「花のようなやしさに……包まれていた」³⁵⁾方で、「恥ずかしがりであり、ロマンチスト的一面をもっておられたことは確かである」³⁶⁾。

以上、長々と書いてしまいました。國分直一、馬淵東一両先生の偉業は、これからも語りつかれ、書きつかれることと思います。偉大な両先生を持ったことは台湾の幸いであります。そして数多くの優れたお弟子さんに恵まれたのは両先生の仕合せであります。

敬具

2006年4月1日

台湾大学人類学系にて

宋丈薰

【追記】

國分直一先生の自敍伝『遠い空』³⁷⁾の補遺と若干の誤植の訂正をします。

p.19 : 「サンパン」は「舢舨」の台湾語音。

p.28 : 「ローマ」は台湾語音の「鱸鰻」で、ごろつき、無賴漢。

p.34 : 「黃帝豆」は台湾名で、お多福豆。

p.133 : 「ゲーカーホイ」は台湾語の「龜壳花」で、毒蛇の一種。

p.136 : 「カンチュー」は台湾語の「牽手」で、奥さん、女房。

p.137 : 「ハンチー」は台湾語の「番薯」で、さつまいも。

p.150 : 写真説明「台湾大学文学院前にて」は、「台湾大学文学院後、あるいは背面にて」が正しく、工作衣着用の左の人物は、当時文学院史学系の職員で、間もなく辞職しました。

p.156 : 「大東經由」は「台東經由」。

p.157 : 「ヤミ出身」は「アミ出身」。

p.158 : 「ヤミの若者」は「アミの若者」。

「海岸ヤミ」は「海岸アミ」。

「ヤミの村」は「アミの村」。

「ヤミたち」は「アミたち」。

p.159 : 「ヤミの若者」は「アミの若者」。

p.160 : 「ヤミと本省系」は「アミと本省系」。

「ヤミの村」は「アミの村」。

p.162 : 「ヤミの女の子」は「アミの女の子」。

p.193 : 写真中の大部分の人物は四大節の礼装として、官帽と官服のそでに金縫を入れ、肩章をつけ、帶剣し（以上 p.17 参照）、勳章所有者はそれを佩用している。國分先生の蝶ネクタイ姿は「植民地官僚世界への無言の反発」（p.210）であり、勇氣

のいる行為であった。

p.213 : 「十三甲地区」は「十三行地区」。

p.232 : 「プリミティブ・ハート」は「プリミティブ・アート」。

p.233 : 『文化史序説』は『日本文化史序説』。

p.235 : 「砂丘の大地」は「砂丘の台地」。

p.236 : 「台南大地」は「台南台地」。

p.237 : 「仏廟」は「文廟」。

p.249 : 「民俗学」は「民族学」。

「王国偉」は「王国維」。

p.254 : 「第二号 [1997年]」は「第五号 [2001年]」。

「北江」は「北港」。

p.256 : 「コロニーの報告」は「コラニの報告」。

p.259 : 「軍官服」はすべて「官服」。p.86 の写真で國分先生は通常の官服を着用している。

p.193 の【追記】参照。

p.272 : 写真左の人物は台中県大甲東在住の王鴻博（本名：王三派）氏で、撮影者は劉茂源さんです。王氏については、『台湾考古誌』³⁸⁾で二頁にわたり、そして『台湾考古民族誌』³⁹⁾にも簡単な記載があります。王氏は台湾の所謂「白色恐怖」⁴⁰⁾時代、組織に参加した罪名で 1953 年に処刑されましたか、2004 年台湾政府によって名誉が回復されました。

注

1) 木下 2005。

2) 金子 2005a : 162。

3) 夏目 1909。

4) 金子 2005a : 160。

5) 金子 2005b : 238。

6) 同上 : 238。

7) 安溪、平川編 2006。

8) 同上 : 147。

9) 同上 : 63-66。

10) 金闇、國分 1979 : 27-28。

- 11) 高橋編 1980: 102。
- 12) 安渥、平川編 2006: 37, 240。
- 13) 金子 2005a: 159。
- 14) 金子 2005b: 238。
- 15) 金子 2005a: 159。
- 16) 同上: 238。
- 17) 金子 2005b: 238。
- 18) 同上。
- 19) 同上。
- 20) 金子 2005a: 168 で、金子さんは「私は巨石文化という言葉は使いたくない」と口述して居ります。但し、この名称は1925年に鳥居龍蔵がはじめて使用し、鹿野忠雄も1930年以來屢々常用し、台湾考古学上で固定した感があるので接用したことは、宋 1967: 145 に明記してあります。だが、この名称が誤用されていることは宋 1993 が指摘しています。ある言葉を使いたいとか「使いたくない」とか言うのは別問題です。
- 21) 金子 2005a: 167。
- 22) 同上。
- 23) 関鑑子訳詩、M. フランデル作曲「カチューシャ」以外に、私が子供の頃「カチューシャ可愛いいや...」という歌が流行したこと覚えております。馬淵先生のカチューシャは、後者の方のようです。
- 24) 金子 2001a。
- 25) 金子 2005a。
- 26) 金子 2001b。
- 27) 金子 2001b: 255。
- 28) 金子 2001a。
- 29) 鈴木 2001。
- 30) 安渥、平川編 2006: 309。
- 31) 安渥、平川編 2006。
- 32) 同上: 1-224。
- 33) 松澤 2001: 250。
- 34) 小川 1988: 380。
- 35) 松澤 2001: 252。
- 36) 同上。
- 37) 安渥、平川編 2006。
- 38) 金闇、國分 1979: 49-50。
- 39) 國分 1981: 359。文中の王三 ； 爪は王三派の誤植。
- 40) 許 2004: 0267-0268。

- 引用文献 (ABC順)
- 安渥遊地、平川敬治 (Ankei Y. & K.Hirakawa) 編
2006 『遠い空——國分直一、人と學問』 海鳥社
- 許雪姬 (Hsu H.) 總策畫
2004 『台灣歷史辭典』 行政院文化建設委員會
- 金闇丈夫、國分直一 (Kanaseki T. & N.Kokubu)
1979 『台灣考古誌』 法政大学出版局
- 金子えりか (Kaneko E.)
2001a 「デ・ボクレール女史について」『台灣原住民研究』第5号: 173-176 日本順益台灣原住民研究会
- 2001b 「馬淵東一先生の思い出」同上: 253-256
- 2005a 「台灣・琉球研究50年を語る——金子えりか先生インタビュー」『台灣原住民研究』第9号 155-188 台湾原住民研究会
- 2005b 「國分直一先生を偲ぶ」同上: 237-243
- 木下尚子 (Kinoshita N.)
2005 「梅ヶ峠の國分直一」『毎日新聞』(熊本版) 2005年2月26日
- 國分直一 (Kokubu N.)
1981 『台灣考古民族誌』 廣友社
- 松澤貞子 (Matsuzawa K.)
2001 「墓前にて馬淵東一先生を偲ぶ」『台灣原住民研究』第5号: 250-252 日本順益台灣原住民研究会
- 夏目漱石 (Natsume S.)
1909 『三四郎』 春陽堂
- 小川正恭 (Ogawa M.)
1988 「馬淵東一」『文化人類学群像』(日本編) 371-390 アカデミア出版会
- 宋文薰 (Sung W.)
1967 「台灣東海岸の巨石文化」『えとのす』6: 142-156 新日本教育図書
- 1993 「鳥居龍蔵博士と台湾」『徳島の生んだ先覚者——鳥居龍蔵の見たアジア』 11-14 徳島県立博物館
- 鈴木満男 (Suzuki M.)
2001 「馬淵東一先生と私」『台灣原住民研究』第5号: 260-285 日本順益台灣原住民研究会
- 高橋洋二 (Takahashi Y.) 編
1980 「朴原耕三」『夏目漱石』(別冊太陽) 102 平凡社

執筆者紹介（掲載順）

笠原 政治 (かさはら まさはる)	横浜国立大学教育人間科学部教授
金子えりか (かねこ えりか)	元早稲田大学講師
若林 正丈 (わかはやし まさひろ)	東京大学大学院総合文化研究科教授
清水 純 (しみず じゅん)	日本大学経済学部教授
角南聰一郎 (すなみ そういちろう)	(専) 元興寺文化財研究所人文考古学研究室主任研究員
蛸島 直 (たこしま すなお)	愛知学院大学文学部教授
山路 勝彦 (やまじ かつのり)	関西学院大学社会学部教授
山本 芳美 (やまもと よしみ)	都留文科大学比較文化学科准教授
大浜 郁子 (おおはま いくこ)	法政大学兼任講師
華 阿 財 (Valjiluk MAVALIJO)	大武山文化芸術発展協会理事長
石垣 直 (いしかき なおき)	日本学術振興会特別研究員
山田 仁史 (やまだ ひとし)	東北大学大学院文学研究科講師
原 英子 (はら えいこ)	岩手県立大学盛岡短期大学部助教授
宋 文 薫 (Wen-lsun Sung)	国立台湾大学名誉教授
宮岡真央子 (みやおか まおこ)	福岡大学人文学部講師

台灣原住民研究 第 11 号

2007 年 3 月 20 日發行

編集 日本順益台灣原住民研究会

横浜市保土ヶ谷区常盤台 79-1

横浜国立大学笠原政治研究室

編集代表 笠原政治

発行 株式会社 風響社

東京都北区田端 4-14-9

TEL : 03-3828-9249

印刷所 潤光堂

© Shung Ye Japanese Research Group on Indigenous Peoples of Taiwan 2007

Printed in Japan

ISBN 978-4-89489-851-6